

Case	Age	Sex	Primary tumor	Chemotherapy	Radiation	Interval (M)	Type of leukemia	Karyotype	Therapy	Response	Outcome
1, SK	69	M	laryngeal ca	-	+	120	AML (M5)	normal	Ara-C DNR	NR	died 3 M
2, HK	71	M	myeloma	VCR, L-PAM, CP, PRD	-	63	AML (M5)	del(7)	Ara-C	NR	died 1 M
3, KK	52	M	NHL	THP, CP, VCR, MTX, PRD, VP 16	+	40	AML (M4)	t(11;19)	BHAC- DMP	NR	died 9 M
4, TH	53	M	bladder ca	VP 16	-	180 (38)	AML (M3)	t(15;17)	ATRA	CR 18M	relapse died 20M
5, ST	43	M	lung ca	5 FU, CDDP, MMC, VDS, VP 16	+	39	AML (M3)	t(15;17) t(2;11)	ATRA	CR 2 M+	alive

に、新潟県立中央病院内科にて加療した成人の急性非リンパ性白血病（以下 ANLL）症例60例を対象とし検討した。

1932年のWarrenらの判定基準に基づき重複癌を診断し、一次癌の治療に抗癌剤による化学療法が放射線療法が、単独または併用されており、一次癌と白血病発症の間隔が6ヶ月以上の症例を治療関連白血病と判定し、解析した。

【結果】ANLL60症例のうち、治療関連白血病の診断基準に合致した症例を5例認め、5例ともに1995年以降にANLLを発症していた。症例のまとめを表に示す。

【考察】治療関連白血病の増加要因として、癌に対するいわゆる集学的治療法の進歩による治癒（寛解）率の向上と、抗腫瘍剤の進歩が挙げられており、症例の解析と蓄積により、発症の予防と治療の向上が望まれる。

8) AML に対する自己末梢血幹細胞移植併用大量化学療法 phase II pilot study

今井 洋介・広瀬 貴之 (PBSCT 研究会)
石黒 卓朗・張 高明 (造血器腫瘍部門)

第一寛解期のAMLに対する自己末梢血幹細胞移植の臨床効果は現在のところ確立されていない。我々は今回、第一寛解期AMLに対する自己末梢血幹細胞移植のphase II pilot studyを行った。1993年12月以降、標準化学療法にて完全寛解となった15歳から65歳までの

患者を対象とした。105症例を登録し、その年齢中央値は45歳、男性が71名、女性が34名であった。そのうち、56症例に対して自己末梢血幹細胞移植が行われた。46.7%にあたる49症例は、種々の理由で移植が行われなかった。採取した幹細胞については、フローサイトメトリーにてCD34陽性細胞数を測定、その中央値は、 $2.3 \times 10^6 / \text{kg}$ で、early collectionと、late collectionの間に差はなかった。移植前治療としては、BU/CY群と、G-CSF combined BEA群とに分けて行い、後者では特に、副作用として重篤な口内炎を生じた。移植後14~16日後にはおおよそ、好中球500、血小板2万程度まで骨髓機能の回復を得ることができた。移植症例全体の長期DFSは58.8%に達し、その中央値は684日であった。限られた症例数と、短い観察期間ではあったが、今回のphase II studyの結果、AMLにおける自己末梢血幹細胞移植併用大量化学療法はfeasibleであり、AMLの寛解導入後療法として有望であることが示された。この結果をふまえ、現在、1st CRのAMLを対象として、維持療法群と、自己末梢血幹細胞移植群とに分ける無作為臨床試験が進行中である。